

子どもたちと考える 半田のまちづくり



つるぎ町で住んでいるのに、
つるぎ町のことを知らないことが多いね。
町の人に聞いてみようかな。

そうか。自然豊かで、歴史のある町だね。
私たちが住んでいる“半田”について、
もっと調べてみたくなった。



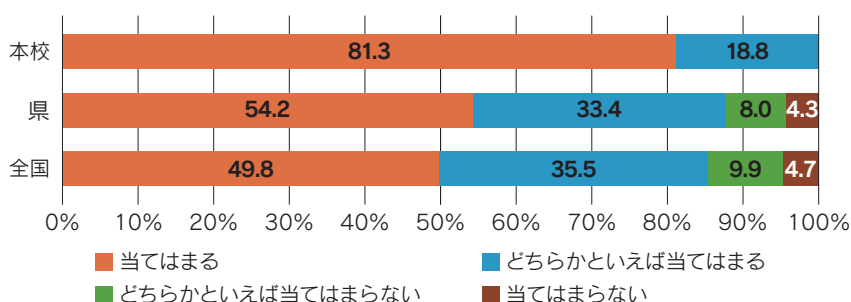
これから生きる児童にとって、自分で課題を発見し、いろいろな人と協働しながら解決していこうとする力は、必要不可欠な能力です。そこで、本校では、「総合的な学習の時間」において、地域の歴史・文化・自然・人と積極的に関わり、地域の良さを知ったり、地域の課題を発見したりする中で、今自分ができることを考えたり、自己の生き方を考えたりすることができる児童の育成をめざしました。ここでは、高等学校で行われている「総合的な探究の時間(探究学習)」の視点を取り入れた授業を行いました。この「探究学習」とは、自己の在り方や生き方と“一体的で不可分な課題”を自ら発見し、それを解決していく学びを展開していくことであり、より深化した学びです。この学びの経験が、授業や進路選択の場面において応用されていくだけでなく、過疎化している地域づくりに貢献するものだと思います。そのためにも、学校・地域・保護者との連携が重要なのです。それが出来ているのが本校の強みです。

どんな実践だったのか、その一部を紹介します。(2024年度の実践)

具体的な取り組み

本校の児童の今をみるために、毎年実施している“全国学力学習調査”の質問紙の結果を分析しました。その中で、「学校が楽しい」と回答した児童が全員だったことに驚きと嬉しさがありました。(右図)これは、全国と比べても極めて高い数値です。こうした実態に甘えてはいけないと教師間で共有しています

R5 学校に行くのは楽しいと思いますか



R5年全国学力学習状況調査質問紙から

が、この調査では大きな課題が見つかりました。それは、「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」という問いには、きわめて低い結果がみられたのです。つまり、『自分で考え、自分から取り組むこと』に対する課題が伺えるのです。

そこで、以下の取組を行いました。

- ① 地域活性化に取り組んでいる人をゲストティーチャーとして招き、話を聞いたり、ワークショップを行ったりした。
- ② 地域の歴史・文化・自然・人を訪ねたり、現地学習(体験活動)を行ったりした。



まちづくりに主体的にかかわろうとする子どもたち

まず、子どもたちに町の実態をあえて示すこととしました。「こんなにも、つるぎ町の人口は減っているんだ」「ぼくたちが大人の22才になった時には、約5,000人。37才になった時にはさらに2,000人も減って約3,000人だよ」「このまま減り続けたら人がいなくなるよ」このスライドを見た時の反応よりも、現実味をおびた発言と動揺に

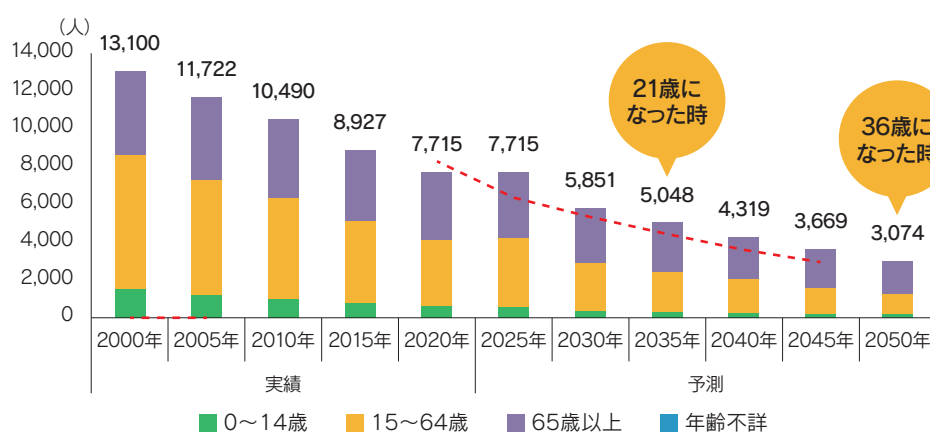
近い様子が見られました。この人口推移のグラフは、あくまでも予想であり、このまま何もしなければこのグラフのような人口になっていくだろうという補足説明を担当から行いました。何となく人が少なくなっていることを感じていた児童もいたと思いますが、こんなに人口が減少していることを初めて具体的な数値を見て、危機感を感じたようでした。特に、地域の課題の学習では、今後の



人口推計を提示したことが大きかったと思われます。こういった負のデータは、なかなか子どもたちに示しにくいものですが、今回は将来急減する人口を知ること、危機感以上に、自分事として“まちづくり”を考えたのです。子どもたちは、これを前向きにとらえた点が新たな発見でした。はじめの方は、「半田をよくできるといいかな」と少し思っただけだった。だけど、総合の学習を進めていくうちに、

半田をよくする方法をたくさん思いついた。それは、いっぱいみんなと話し合った」という声が聞かれました。子どもたちが地域の一員になった瞬間です。まちづくりのワークショップでは、町役場の交流促進課の方々をお呼びしたり、家族で意見を聞きながら、「つるぎ町半田を元気にするために、自分達でできることを考える」という流れが変わっていきました。

つるぎ町の人口の変化(予想)



つるぎ町の人口の変化 町の統計から筆者作成





町のよさ・すばらしさを探究する

本校は学校行事で「ふるさとたんけんウォークラリー」を毎年秋に実施しています。異年齢集団単位で、学校周辺のお寺・神社・公共施設・史跡等を巡り、半田の歴史や人々の暮らしに対する理解を深めるとともに、郷土を愛し、誇りに思う児童の育成をねらいとしています。例年は、お寺や神社、史跡等の各ポイントは、地域の方に説明をしていただいたり、ポイントに関する問題づくりは教員が行っていたりしました。

今回は、ポイントの説明や問題づくりを地域の方や教員が主導で行うのではなく、6年生がポイントの説明や問題づくりをすることで、研究のねらいの一つである「主体的に学び、自己の生き方を考える児童」の育成を実現できるのではないかと考えます。

本校では、異年齢集団の交流活動を週に1回、朝の活動を使って行っています。また、学校運営協議会もしっかり機能しています。そこで、今年のウォークラリーは6年生がポイントを全て説明することを提案しました。



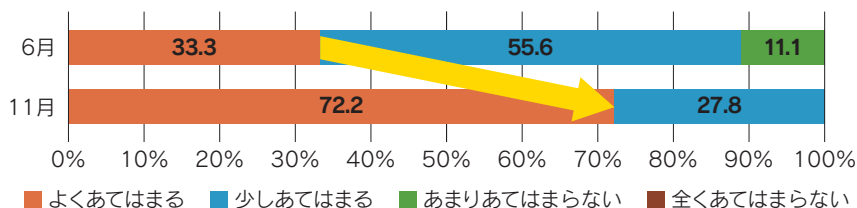
ウォークラリー（2024年11月22日）では、異年齢集団であるなかよし班ごとにコースをまわり、常夜灯、鬼門庵、堂面庵、半田駅、見性寺、出雲大社美馬教会、八幡神社、半田用水耕地跡地、大久保亀吉像、建神社の全10ポイントを、6年生が、班の児童や地域の方、保護者に向けて説明を行いました。

こうした活動には、鳴門教育大学の支援を受け、現地を実際に訪れて、見たり聞いたり体験するため、児童の移動用の“借り上げバス”を提供していただいたり、ワークショップ用の文具の提供を受けました。

総合的な学習の時間における探究的な活動を通して、どのような変容があったかを明らかにするために、5年生19名6年生16名児童にアンケートを実施しました。そこでは多くの成果がありましたが、特に、『身近な人や社会のためにできることをしたいと思っている』という質問項目（下図のグラフ）の増加が大きく、子どもたちの意識を変容させたと考えます。

地域の教育資源を有効に活用することにより、児童自らが、地域のことを知り、地域の課題を発見したり、課題解決への道筋を考えたりする探究的な学習は有効であり、この実践を通して、地域への愛着をもち、自己の生き方を考えられる児童の意識の変容が確認されました。

9. 身近な人や社会のためにできることをしたいと思っている。



児童アンケートの一部 6月と11月の変容から（筆者実施）



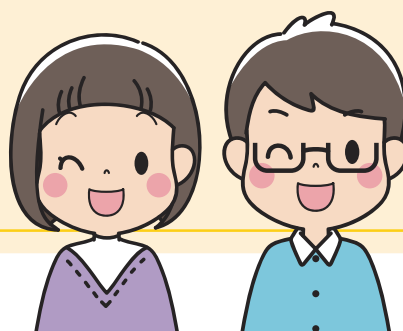
子どもからの提案



子どもたちが考えた半田活性化案(5年生)

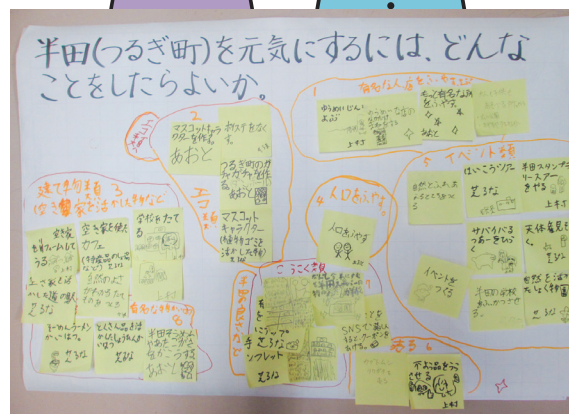


- 1 空き家をいかして、体験活動ができるお店やカフェをつくる
- 2 半田の自然をいかした植物園、体験など
- 3 於安パークをいかしたイベント
- 4 森林体験宿泊施設
- 5 世界農業遺産体験



今ある資源をいかしたイベントやお店体験活動ができるようになれば良いと考える子どもが多かったようです。例えば、於安パークは、かなり前にできた、半田にある公園なのですが、できた当時は管理も行き届いていて、町内外から多くの人々が来ていました。芸能人が来て、それが放映されたことで、県外からもたくさん人が来ていたようです。春になると桜フェスティバルがあり、半田小学校の運動場いっぱいになるくらいの人々が来て、バスでピストンをして、於安パークの桜の花見をしていた大きなイベントでした。しかし、コロナをきっかけに中止となってしまいました。子どもたちは遊びに行きたいのですが、遊びに行けない状況になっています。こういう現実を見つめながら、未来に向けて半田を力強いものにしたいと真剣に考える子どもたちをみて、過疎化に嘆くより、何をしたらいいか、子どもたちに学ぶことが多い実践でした。

この実践に協力いただきました行政、地域、保護者の方に厚く御礼を申し上げます。



小学校から始める「探究学習」

発行日 令和7年3月15日

監修 鳴門教育大学教職大学院 名誉教授 阪根健二

作成 つるぎ町立半田小学校教諭 中妻理恵 (鳴門教育大学現職派遣大学院生)

 鳴門教育大学

令和6年度 地域連携協力事業研究助成 (地域の教育的資源を有効活用した教育活動)